

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11 文明堂3F  
電話三五四-1547 七一番

清元協会

目黒区南三-1-16  
電話五七二六-0443 三番

財団法人 古曲会

中央区銀座八-六-三 新橋会館  
電話三五七-0216 六番

新宿区神楽坂六-27  
電話三二六-0180 四番

常磐津協会

世田谷区岡本一-32-18  
電話三七〇七-3763 三番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二-11-19 四  
電話三五四-2656 四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二-15-12 四〇三  
電話三五八五-9916 六番

(五十音順)

助成 東京都

芸団協・邦楽振興基金

ⓄC P R A (美演家著作隣接権センター)

平成十八年三月四日(土)

国立劇場小劇場

第一部 十二時開演 三時三十分終演

第二部 午後四時開演 七時三十分終演

2006 都民芸術フェスティバル助成公演

第三十六回

# 邦楽演奏会

邦楽名曲選

## 2006都民芸術フェスティバル参加公演一覧

種目	演目等	開催日/会場	主催団体	
オペラ	藤原歌劇団公演 G. プッチーニ作曲「蝶々夫人」全2幕 (字幕付原語上演)	2/3・4・5 東京文化会館大ホール	日本オペラ振興会 03-5466-3181	
	東京二期会オペラ劇場公演 G. プッチーニ作曲「ラ・ボエーム」全4幕 (字幕付原語上演)	2/23・24・25・26 Bunkamuraオーチャードホール	東京二期会 03-3796-1831	
	東京室内歌劇場公演 モンテヴェルディ作曲 音楽寓話劇「オルフェオ」(字幕付原語上演)	2/18・19 紀尾井ホール	東京室内歌劇場 03-5642-2267	
オーケストラ	東京交響楽団	1/20	東京芸術劇場大ホール 日本演奏連盟 03-3437-6837	
	日本フィルハーモニー交響楽団	1/31		
	読売日本交響楽団	2/4		
	東京都交響楽団	2/15		
	新日本フィルハーモニー交響楽団	2/24		
	東京シティフィルハーモニック管弦楽団	3/10		
	東京フィルハーモニー交響楽団	3/18		
室内楽	「大公とます」室内楽のタベ	2/21	東京文化会館小ホール 日本演奏連盟 03-3437-6837	
	「クワトロ ピアチェーリ」弦楽四重奏のタベ	3/20		
ポピュラー	「ポピュラー音楽のすべて」 ジャズ・シャンソン・タンゴ・ラテン名曲選	1/15 日比谷公会堂	日本音楽家協会 03-3585-3903	
邦楽	邦楽演奏会 義太夫・清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲	3/4 国立劇場小劇場	義太夫協会(邦楽連合会) 03-3541-5471	
現代演劇	「ベルナルダ・アルバの家」	2/17~2/26 THEATRE1010(シアターせんじゅ)	シアター1010(せんじゅ) 03-5244-1011	
児童・青少年演劇	人形劇「すてきな3にんぐみ〜もうひとつの話〜」	2/16~3/28 ルネこだいら、紀伊国屋ホールほか	日本児童・青少年演劇団協同組合 03-5909-3064	
バレエ	「白鳥の湖」全4幕	2/28・3/1・2 東京文化会館大ホール	日本バレエ協会 03-3499-5525	
	「ジゼル」全2幕	2/4・5 ゆうぼうと簡易保険ホール	スターダンサーズバレエ団 03-3401-2293	
	「カルメン」全2幕	1/14・15 新国立劇場中劇場	東京シティバレエ団 03-5638-2720	
現代舞踊	「Harmonization」、「煌き」、「cuirasse-鎧」、「走れメロス」	1/26・27 めぐろパーシモン大ホール	現代舞踊協会 03-5457-7731	
日本舞踊	日本舞踊協会公演	2/15・16・17 国立劇場大劇場	日本舞踊協会 03-3533-6455	
能楽	式能	2/19 国立能楽堂	能楽協会 03-5925-3871	
民俗芸能	東京都民俗芸能大会 「よみがえる 江戸の四季」	3/4・5 東京芸術劇場中ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03-3471-1355	
寄席芸能	都	三遊亭園歌ほか	2/15 調布グリーンホール	都民寄席実行委員会 03-5909-3080
	民	桂歌丸ほか	3/1 ルネこだいら	
	寄	鈴ヶ倉馬風ほか	3/3 東京芸術劇場中ホール	
	席	桂米丸ほか	3/4 八王子市民会館	
		(浪曲の会)玉川福太郎ほか	2/11 江戸東京博物館ホール	



### 二〇〇六年都民芸術フェスティバルの開催に寄せて

東京都知事 石原 慎太郎

都民芸術フェスティバルは、優れた舞台芸術に親しむ機会を広く都民に提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を図るため、東京都が助成して開催するもので、今年で三十八回目を迎えます。東京の春を彩る行事として本フェスティバルの開催を心待ちにするファンの方も多く、今年もその期待に応え、一月十四日から三月二十八日まで、都内各地で延べ七十二の舞台公演が開催されます。

近年、文化力による都市の再生や産業の活性化が注目されており、世界的な潮流になりつつあります。東京においても、歴史と伝統に育まれた優れた伝統芸能をはじめ、音楽、演劇、舞踊など様々な分野の芸術団体が活動しており、この機会に、日本の首都・東京を国際的な発信力のある文化都市としてアピールしていきたいと考えています。

皆さんには、各会場で繰り広げられる多彩な舞台芸術を存分に堪能していただくとともに、特に若い方々には、この機会に優れた芸術文化に親しんでもらうことを期待しています。

最後に、本フェスティバルに参加された皆様のご尽力に感謝するとともに、本公演のご成功と今後益々のご発展を祈念いたします。

第一部 一番 組 (十二時開演)

奥組・安村檢校作曲

一、 箏曲 飛燕曲

箏 藤井千代賀 二谷藤美賀 山口明代賀 赤澤惠耀賀  
岸辺美千賀 高羽洋賀 杉本禧代賀 大山千重賀

二、 常磐津 椀久色神送 (椀久)

わんきゅういろがみおくり  
浄瑠璃 常磐津文字増十 三味線 常磐津文字孝代  
同 常磐津文字由志 同 常磐津文字東久  
同 常磐津 美奈衛 上調子 常磐津孝 野

三、 新内 東海道中膝栗毛 | 組打の段 |

浄瑠璃 鶴賀 志代寿 三味線 鶴賀 賀喜代寿郎  
上調子 鶴賀 賀喜代志寿

四、 長唄 秋色種

唄 杵屋勝良 三味線 杵屋静子  
同 杵屋勝昭 同 杵屋勝真代  
同 杵屋勝一佳 上調子 杵屋勝幸恵

休 憩 (十分)

五、宮 菌

夕霧ゆうぎり由縁ゆかりの月見つきみ  
(夕霧)

浄瑠璃	宮 菌	千 碌	三味線	宮 菌	千 加 寿
同	宮 菌	千 碌 司	同	宮 菌	千 佳 寿 弥
同	宮 菌	千 碌 季	同	宮 菌	千 碌 美

六、義太夫 三十三間堂棟木由来

浄瑠璃 竹 本 朝 重  
三味線 鶴 澤 寛 也

七、清 元 明烏花濡衣 (明がらす)

浄瑠璃 清 元 延千之丞 三味線 清 元 延志佐  
同 清 元 延勇輝 同 清 元 延荣勇美  
同 清 元 延明寿 上調子 清 元 延美夏  
同 清 元 延八千代

(終演予定 午後三時半ごろ)

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、尺八雲井獅子

琴古流尺八本曲

本手	青木鈴慕	木村鈴簫	木内鈴芳	野口静楓
	西村鈴宏	実方鈴雀	軍司鈴抄	茂幾俊雄
	今億鈴頌	林 鈴麟	下島静浩	小澤慎治
替手	佐野鈴霏			
	青木彰時	笠井鈴宇延	平山鈴流	山岡静翔
	佐野鈴秀	安達鈴命	遠藤鈴匠	福川正男
	横田鈴琥	飯野鈴春	柳島静紘	黒田 慧
	山口鈴倍			
二尺管	竹内鈴白	金野鈴道	片倉鈴香	原島鈴松
	高橋鈴寿	田中鈴基	寺林鈴隆	征矢鈴彭

二、萩江八島

唄	萩江ちか	三味線	萩江都世
同	萩江香幸	同	萩江香世
同	萩江幸代	同	萩江理

三、新内梅雨衣醉月情話 (花井お梅)

浄瑠璃	富士松	鶴千代	三味線	新内	勝一朗
			上調子	新内	勝志壽

四、清元忍逢春雪解 (三千歳)

浄瑠璃	清元	清栄太夫	三味線	清元	菊 輔
同	清元	清美太夫	上調子	清元	美三郎
同	清元	国恵太夫			

休 憩 (十分)

五、義太夫

新版歌祭文

野崎村の段

浄瑠璃	久作	竹本	駒之助	三味線	鶴澤	津賀寿
お光	竹本	綾之助	ツレ	鶴澤	駒治	
お染	竹本	越孝	〃	鶴澤	三寿々	
久松	竹本	土佐子	〃	鶴澤	津賀栄	
母	竹本	土佐恵	〃	野澤	喜恵博	

六、常磐津

恩愛晴関守

(宗清)

浄瑠璃	常磐津文字太夫	三味線	常磐津	八百二
同	常磐津津太夫	同	常磐津	絃寿郎
同	常磐津小文太夫	上調子	常磐津	祐二郎
同	常磐津文喜太夫			

七、長唄

渡辺綱館の段 (綱館)

唄	和歌山富司郎	三味線	松永忠五郎
同	和歌山富朗	同	松永鉄九郎
同	和歌山富司智朗	同	岡安美幸
同	杵屋三美郎	同	松永忠史朗

籥	福原百七
小鼓	梅屋小三郎
立鼓	梅屋福太郎
大鼓	望月左喜三郎
太鼓	望月左之助

(終演予定 午後七時半ごろ)

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

第一部

一、飛燕曲

安村検校(？)一七七九)作曲。奥組新曲。「飛燕の曲」「飛燕」とも書く。宝暦五年(一七五五)序の『撫箏雅譜集』に「此一曲新組第一之秘事伝受也」とある。

玄宗皇帝の命により、楊貴妃と牡丹の花をたたえて作った李白の『清平調三首』の各首を二歌づつに翻案して六歌に配したものである。曲の名称は原詩の第二首に引かれた飛燕(前漢成帝の妃趙飛燕。楊貴妃との比較のために引かれる)に基づく。第四歌の結びに「あわれ馴れしつばくらめ」とあるのが曲名の由来。なお「深見草」とは牡丹のこと。

二、椀久

昭和二年(一九二七)三月、常磐津研究会で常磐津松尾太夫と常磐津文字兵衛が初演。田村西男作詞、三世常磐津文字兵衛作曲。前年十二月に帝国劇場の女優劇として上演された「椀久」の淀川堤椀久物狂いのくだりだけを常磐津に改作したものである。

大坂の豪商椀屋久右衛門(久兵衛とも)が、新町の遊女松山と馴染みを重ねて、豪遊の果て座敷牢に入れられ、のち発狂して死んだという。それを題材にしたものだが、古くは一中節、義太夫、長唄などに取り上げられ、「椀久もの」という作品群が生れている。本作はもつとも

新しい作品で、江島屋其碩の『お伽名題紙衣』によったもの。実説の椀屋久右衛門が陶器の椀や皿を商っていたというのを踏まえて、椀久が赤絵の皿を作ろうと苦心するが、金策尽きて狂乱し、松山も殺して淀川に身を投げるといふ筋にまとめている。

色神送りというのは、江戸時代に大坂あたりで行われた風習。椀久のように傾城買いなどに身を持ち崩した者の着物を笹に結びつけて、大勢で「移した移した」と囃し立てながら淀川へ流した。

三、膝栗毛―組打―

富士松魯中作詞、作曲。原作は十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』。それをもとに嘉永三年(一八五〇)ごろから脚色して「赤坂並木」「市子口寄せ」とこの「組討」とで「弥次喜多三段」として発表した。

弥次郎兵衛と喜多八は、馬に乗って旅を続けているのだが、その馬子たちの話が気になって仕方がない。熊谷の次郎と無官の太夫と呼び合っているのである。聞いてみると村の鎮守の祭に素人狂言をやるのだという。二人は江戸の役者だといって「一ノ谷」の組討のくだりをやってみせることになる。熱演しているうちに、馬が驚いて走り出し、喜多八を振り落とし、弥次郎兵衛を乗せた馬は行方不明になる。深田からようやくやくはい上がった喜多八は、ふるえながら弥次郎兵衛を探す。

#### 四、秋色種

弘化二年（一八四五）十二月一日、江戸麻布不二見坂の南部侯邸の新築祝いとして初演された。十世杵屋六左衛門作曲。上調子は十一世六左衛門作曲であろう。作詞は盛岡藩主南部三十六代利敬の未亡人教子の方。または三十九代信侯、あるいは二人の合作と推定される。

この曲について作曲者に「長唄はどんな歌詞にも節が付けられるか」と問われて「はい何にでも」と答えたので、中にある漢詩が加えられたというエピソードが知られている。

全体に上品な歌詞で、麻布あたりの秋の情趣をまとめたものだが、途中に「変態續紛たり……」という菅原道真の漢詩を入れて変化をつけているのが特色。前弾は箏曲の「六段恋慕」「岡安砧」をもとにしたもので、途中には長い「虫の合方」もあつて器楽曲的な面も強い。作曲者は文政十二年（一八二九）初演の「吾妻八景」を意識したものと思われる。ともに演奏用長唄の傑作として知られている。

#### 五、夕霧

宮園鸞鳳軒作詞、作曲。宝暦十三年（一七六三）刊の『増補宮園集都大全』に初見。もと京都島原の遊女夕霧は、抱主とともに大坂へ下り、江戸の高尾、京都の吉野太夫とともに三美人として知られたが、延宝五年（一六七七）秋にふとした病にかかり、翌年正月六日に短い生涯

を終えた。享年二十二歳とも二十七歳ともいう。その死を惜しんで二月には「夕霧名残の正月」という芝居が上演され、恋人役の伊左衛門に初代坂田藤十郎が扮して大当り大評判になった。その後も多くの「夕霧もの」が作られたが、その三十五回忌に当る正徳二年（一七一二）に近松門左衛門が「夕霧阿波の鳴渡」を発表した。

それをもとに宮古路豊後掾が語りものにしていたものに、さらに鸞鳳軒が手を加えたもの。現存する「夕霧もの」ではもつとも古い。その後に富本「春夜障子夢」（これはのち清元に移された）、常磐津「其扇屋浮名恋風」、新内「廓文章」などが作られ、また義太夫では「曲輪障」も作られ、「吉田屋」は歌舞伎でも人気狂言となっている。今日の演奏は時間の都合でかなり短縮されている。

#### 六、卅三問堂

原作は宝暦十年（一七六〇）十二月、大坂豊竹座で初演された「祇園女御九重錦」。若竹笛躬、中邑阿契の合作。その三段目だけを文政八年（一八二五）七月、大坂御霊境内で豊竹君太夫、初世豊竹巴太夫らで初演したもの。

通し矢で有名な京都の三十三問堂にまつわる伝説を扱ったもので、浄土真宗の聖人横曾根平太郎をモデルに、柳の精との異種婚姻譚を加え、縁のある熊野を舞台にした作品。

五年前の鷹狩りの時、鷹の足の紐が枝にからんだので、柳の木が伐り倒されようとしたが、



平太郎が弓で紐を切ったので、柳の木は助かった。柳の精はお柳という女性となってあらわれ、平太郎と夫婦になり、みどり丸という子まで生れた。しかしその柳の木は、ついに三十三間堂の棟木に伐られることになり、お柳は夫に別れを告げて去って行く（平太郎住家の段）。伐られた柳は新宮の浜まで引いて行くことになったが、平太郎の家の前で動かなくなる。平太郎が木遣りを唄い、みどり丸が綱を引くと、さすがの柳の木も動き出す（木遣り音頭の段）。前場ではお柳の嘆き、後場では木遣りがきかせどころになっている。

## 七、明烏花濡衣

三世桜田治助作詞、二世清元延寿太夫作曲。一説に清元千蔵作曲という。嘉永四年（一八五〇）二月、江戸市村座で、増補裏表二十二段「仮名手本忠臣蔵」の八段目「道行旅路の藪入」の裏として初演された。新内の「明烏夢泡雪」を清元化したもの。

新内の「明烏夢泡雪」は、安永元年（一七七二）ごろ、鶴賀若狭掾が作詞、作曲した作品で、新内の代表曲として人気が高い。春日屋時次郎は、山名屋の遊女浦里と馴染みを重ね、借金で首がまわらないので死ぬ覚悟で浦里の部屋に隠れている。遣り手のかやに見つけられ、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は若い衆に表へ放り出される。浦里は降りしきる雪の中、庭の古木に禿のみどりとともに縛られ、亭主に折檻される。隣の二階からはめりやすが聞こえてくる。やがて時次郎が屋根伝いに助けにくるという筋。

清元は新内を短くまとめたもので、初演以後は「忠臣蔵」とは関係なく演奏される。舞台化するのに際して、当時流行していた新内を使うのについて、延寿太夫が富士松魯中から五十両の礼金で譲り受けたという伝説がある。

## 第二部

### 一、雲井獅子

琴古流本曲。出所不明。福岡県博多の虚無僧寺一朝軒に伝わった曲。普化宗修行の日課として、午後の托鉢行脚の際に吹かれていた。

もとはおめでたい獅子舞の伴奏として用いられていたが、長い時を経て、都会的に洗練された旋律となり、よくお祝いや厄除けの行事で演奏されてきた。本日の演奏は二代青木鈴慕手付の二尺管と一尺八寸管本手・替手による二重奏になる。（この項、鈴慕会）

## 二、八島

地歌の「八島」を荻江に移したものの。年代は不明だが、おそらく江戸時代の末ごろに移したものであるが、あるいは明治になってからかも知れない。

地歌の「八島」は名古屋の藤尾勾当が、能の「屋島」から適宜省略・補綴したもの。西国行脚の僧（西行法師）が屋島の浦で漁夫から壇ノ浦の源平の合戦のありさまを聞くというもの。短い曲であるが、変化もあり、荻江の代表曲として人気が高い。

## 三、花井お梅

五代目富士松加賀太夫が作曲、明治二十一年（一八八八）三月に発表した。その前年六月九日の夜、日本橋浜町二丁目の横丁で、近くの待合酔月楼の女将花井お梅が、番頭の峰吉を出刃包丁で刺し殺した。この事件は世間で大評判になり、『東京絵入新聞』が「花井於梅酔月奇聞」を連載した。その記事の一部をアレンジして新内にしたもの。

お梅は下総佐倉の生れ。東京の岡田某の養女になり、のち柳橋から芸者に出る。二十歳の時に実父にめぐり合い、花井家に復籍して両親や兄妹の面倒を見ることになった。さらに新橋芸者になり、やがて日本橋浜町に酔月楼という待合を開いたが、お梅の浮気や酒乱を心配した父親は、酔月楼の名義を自分のものにしていった。父娘が対立しているのに加えて、番頭に取り立ててやつた峰吉

も裏切ったと誤解して殺害したものらしい。

お梅はその夜のうちに父に伴われて自首し、無期徒刑の判決を受けたが、十六年後の明治三十六年に特赦で出獄した。その後はいろいろな話題を提供したが、大正五年に五十三歳で死亡したという。いかにも明治らしいのが「十二時」とか「俵ガラガラ」、あるいは「私の自由」などという言葉で、「向こうへチラ／＼小提灯」は原文からの引用。「うきふし繁き三筋の流れ…」以下のクドキが知られている。明治期の新内の代表作として人気が高い。

## 四、三千歳

河竹黙阿弥作詞、清元お葉（四世延寿太夫の妻）あるいは二世清元梅吉作曲ともいわれるが、あるいは二人の合作かも知れない。明治十四年（一八八一）三月、東京新富座で「天衣紛くもにまじり上野初花うえのはな」の六幕目「大口屋寮の場」の余所事浄瑠璃として初演された。

お尋ね者になった直次郎が、甲州へ高飛びをしようと雪の中、入谷へさしかかり、そば屋に立ち寄る。そこで三千歳が近くの大口屋の寮に出養生にきていると聞いて、按摩の丈賀に手紙を届けさせ、そと逢いに行く場面。

片岡直次郎も三千歳も実在した人物で、直次郎は天保三年（一八三二）に処刑され、その死骸を三千歳が引き取って回向院に葬ったという。講釈師松林伯円の「天保六花撰」で知られるようになり、さらに前記「天衣紛上野初花」でいっそう有名になった。歌舞伎で初演された

時、実際の三千歳は、五代目尾上菊五郎の扮した直次郎を見て「本物の直はんはもつと良い男だ」と言ったという。

## 五、野崎村

近松半二作。安永九年（一七八〇）九月、大坂竹本座で初世竹本組太夫、初世竹本男徳齋らで初演された。角書に「お染／久松」とあるように、宝永五年（一七〇八）正月にあつた油屋の娘お染と丁稚久松の心中事件を扱った作品のひとつで、上下二段。上の「野崎村の段」が情景・内容ともにもすぐれているので、よく演奏され、天明五年（一七八五）以降は、歌舞伎でも人気狂言として上演されている。

和泉の国石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は、主家の重宝を紛失したために切腹。六歳の遺児久松は乳母が引き取り、野崎村の兄久作に預ける。久松は十歳の時に油屋に丁稚奉公に出され、そこで娘のお染と恋仲になったというのがこれまでの伏線。

久松はお染と忍び逢っている時、集金してきた金を奪われ、一味の手代小助に連れられて故郷の野崎村に帰ってくる。久作はかねてから後妻の連れ子のお光と久松を夫婦にするつもりでいたので、お光も嬉しくてたまらない。そこへ野崎参りにかこつけてお染が跡を追ってきたところから。久作に意見されて二人は別れると言ったが、それは表向きで、心中する覚悟と悟つ

たお光は、髪を切つてあきらめる。「嬉しかったはたった半時」というお光の心情がいたましい。二人を迎えにきたお染の母の計らいで、お染は船で、久松は駕籠で帰って行く。時間の都合で大幅に省略しての演奏となる。

二人が帰って行く段切れの場面の三味線はよく知られたメロディーで、今日は五挺でのツレ弾きで聞いていただく。これは歌謡曲「野崎小唄」にも使われていて、義太夫を知らない人もお馴染みの曲である。

## 六、宗清

奈河本輔作詞、五世岸沢式佐作曲。文政十一年（一八二八）十一月、江戸市村座の「貢之雪源氏鼻眞」の一番目三立目で初演された。近松門左衛門作の「源氏烏帽子折」の二段目「宗清館の場」の切を翻案したもの。

源義朝の愛妾常磐御前が、義朝の討死の後、三人の幼な子を連れて雪の中を落ちて行く途中、木幡の関にさしかかる。そこは清盛の命令で義朝の遺児を捕らえようと、平宗清が関を守っているが、重盛からは別の内命を受けているという設定。常磐御前の操と引き替えに三児（今若、乙若、牛若）の命を助けるように言いふくめる宗清の胸中を主題にしたもの。しかしこれはすべて、鞍馬山で牛若丸が見た夢であったとしている。その後に長唄「鞍馬山」を上演したこともある。

## 七、綱館

作詞者未詳、三世杵屋勘五郎作曲。明治二年（一八六九）開曲。羅生門で鬼の腕を切り落とす渡辺綱が、陰陽師安倍晴明の勘文（指導）にしたがって、七日の物忌みをしているところへ、はるばる津の国渡辺の里から伯母が尋ねてくる。物忌み中といっても承知をしないので、やむなく内へ招き入れ、酒を勧める。伯母は曲舞を舞い、鬼の腕を見せてくれとせがむので、唐櫃の蓋をとると、しげしげと見ているうちに鬼の正体をあらわし、腕を取り、茨木童子と名乗って姿を消したという筋。

これは古く寛保元年（一七四一）七月に江戸中村座で上演された「兵四阿屋造」という大薩摩を復活させたもの。伯母が曲舞を舞う「曲舞の段」は、安永元年（一七七二）正月江戸中村座で上演された「雲井里言葉」から取ったもので、明治中期に加えられた。

段取りがよく、話の筋もわかりやすいので、よく演奏される名曲。作曲者も気にいった曲と言っていたという。なおこの題材から、三世杵屋正治郎が舞踊曲として「茨木」を作曲している。

▽歌詞の中に今日の人権意識に照らして一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、そのままにしたことをお許し願います。

## 御礼 邦楽連合会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございます。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆくりとお楽しみ下さいますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も同じくここ国立劇場小劇場で、三月四日（日）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。

ありがとうございます。